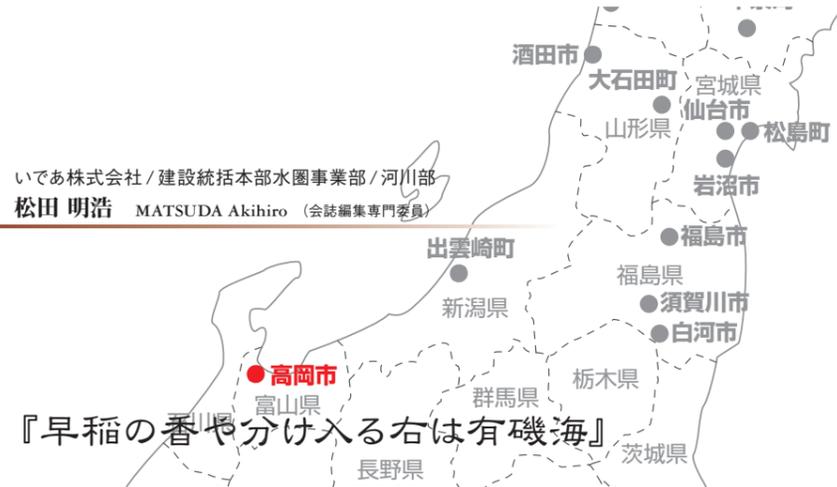


あの頃の風景

おくのほそ道 第12回

歴史が息づく町 「高岡」

いであ株式会社 / 建設統括本部水園事業部 / 河川部
松田 明浩 MATSUDA Akihiro (会誌編集専門委員)



① 有磯の海 (写真提供:公益社団法人富山県観光連盟)

有磯海とは、富山県高岡市北部の二上山が富山湾へ没する現在の雨晴海岸付近の岩石(磯浜)海岸を、奈良時代の歌人・大伴家持が「越の海の荒磯の波」と万葉集で詠んだものが、時代が下って「有磯」に変わり、やがて万葉の響きを思い起こさせる歌枕「有磯海」となったとされている。現在でも気象条件が整うと、眼前に荒々しい雨晴海岸から富山湾越しに白銀の剣・立山連峰が広がる絶景の景勝地である。

1689(元禄2)年の旧暦7月14日(陽暦8月28日)、越後から親不知の難所を抜けて市振に泊まった芭蕉一行は同行した曾良の日記などから、「くろべ四十八が瀬」と詠んだ黒部川や多くの川を渡り、那古の浦(富山県射水市~高岡市伏木付近)に入ったとある。岸沿いを氷見まで足を伸ばし、かの名高い歌枕の地である有磯海を

見たいとしていたところ、現地では一夜の宿を借りることも無理と言われ、高岡から倶利伽羅峠を越えて金沢へと進んだとのことである。冒頭の早稲の香やの句は、有磯海に後ろ髪をひかれながら、先を急いだ心情を詠んだ句とされている。

現在、富山県第二の都市である高岡市は、古くから地域の中心として発展してきた町である。奈良時代、高岡市北部に位置する伏木地区は越中国の国府があり、国庁や国分寺などが置かれ、政治や文化の中心として機能していた。大伴家持はここに国主として赴任し、風光明媚なこの地の景色を和歌に詠み、その多くが万葉集に収められ、現在に伝わっている。

近世には、二代加賀藩主前田利長が1609(慶長14)年に高岡城を築き、高岡は城下町としてその歩みを始め



②(上) 現在の高岡市伏木気象資料館として使われている旧伏木測候所

③(左) 明治16年頃の伏木測候所(高岡市蔵)

④(右) 明治~大正末期の高岡市山町筋(高岡市立博物館蔵)

⑤(下) 現在の高岡市山町筋



るが、そのわずか5年後に利長が急死し、さらにその翌年の「一国一城令」によって高岡城は廃城となった。しかし、利長を継いだ三代前田利常は、次々と殖産興業の政策を打ち出し、高岡を城下町から商工業の町へと変換させた。小矢部川や庄川の水運を利用して多くの米や材木が集まり、高岡銅器や高岡漆器もこの頃から始まり、高岡は加賀藩の一大経済都市として発展していくことになる。

明治になると高岡はさらに大きな商工業都市へと変貌していく。江戸時代より高岡中心部の旧北陸道に面する山町筋と呼ばれる地区には大商人が軒を並べていたが、明治の大火を契機に土蔵造りの町並みに作り替えられ、明治の香りを残す町並みが今に伝わっている。

一方、江戸時代より伏木地区は北前船の重要な寄港地となり、やがて廻船問屋から財をなした有力な豪商が新時代の到来にその先頭となって活躍する。そんな豪商の一人であった藤井能三は、教育や港湾整備等の重要性を痛感し、私費で学校や灯台、測候所の整備等

を行い、伏木港の近代化に尽力した。

1899(明治22)年に市制が施行された際には、日本初の市の一つとして「高岡市」が誕生している。

こうした歴史的背景をもとに、現在の高岡市では歴史的・文化的資産を積極的に保存活用した街づくりが進められている。高岡地区では、前田公ゆかりの瑞龍寺や、高岡古城公園をはじめ、土蔵造りの町並みや高岡銅器を生んだ鑄物の町を今に伝える千本格子の町並みなどが残されている。一方、伏木地区にはかつての越中国府跡ともいわれる勝興寺とともに、江戸時代末の廻船問屋の建物を利用した伏木北前船資料館、明治期の建物がそのまま利用されている伏木気象資料館、高岡万葉歴史資料館等が整備され、随所でその悠久の歴史を感じることができる街となっている。

<参考文献>
1)「博物館ノート 高岡のあゆみ」高岡市立博物館 2014.2.28

<取材協力>
1) 高岡市立博物館